

日本同盟基督教団 世界宣教戦略会議

— 4 6 7 0 7 —

**日本同盟基督教団**  
**世界宣教戦略会議**

**2007年8月12日(日) ~ 14日(火)**

（絶倫部）（会中）（絶倫部）

（絶倫部）

（絶倫部）

（絶倫部）

（絶倫部）

（絶倫部）

（絶倫部）

（絶倫部）

（絶倫部）

テレビ放送

主日学校の切符

20年前 (87年) - 国外宣費にへんげんがあるんか  
どうしてるの？

日本同盟基督教団 世界宣教戦略会議

おのりていせし  
おのりていせし

個人での作り  
海外宣教の代わり

50年前

こうりかあるて  
↓ 全部わかる？

—プログラム—

John 3:16

▼ 8月12日 (日)

18:00~19:30 オープニング・歓迎レセプション 中谷美津雄師

19:30~21:30 1. 聖書から学ぶ宣教戦略 (発題: 倉沢正則師、応答: 石川弘司師)

2. 国外宣教40年の評価 (発題: 吉持章師、応答: 寺田由弘師)  
過去のデータとともに (国別も含む)

▼ 8月13日 (月) ※

9:00~12:00 4. 宣教師のトータルケア (発題: 寺田由弘師 応答: 鈴木教子師)

宣教師の発掘・育成・支援 (メンタルケア、子弟教育、他)・退任

10:30 5. 派遣体制のあり方 (発題: 笠川徹三師 応答: 岡山敦彦師)

フェイスミッションと教団派遣宣教の相違  
諸教会の取り組み

14:00~17:30 3. 同盟教団のこれからの宣教戦略 (発題: 国外委員 全員討論)

派遣すべき宣教地  
現地の教会・宣教団体との協力 (現地献身者発掘、育成)  
伝道と社会的責任をどう果たすか (医療、技術、他)  
信徒宣教師・短期宣教師の派遣について

19:30~21:30 6. 戦略討論 (司会: 趙南洙師)

参加者全員による

・ いりま  
・ 石川

▼ 8月14日 (火)

9:00~10:00

ビジョンのまとめ (国外委員、宣教師)

世界宣教への新たなチャレンジ (決議)

※ 8月13日のスケジュールについて

都合により、発題の順番を

3. 4. 5. から → 4. 5. 3. に変更いたしました。

1:40-  
朝会  
GF 170

17:40-  
朝会

8 神の国は天にあり  
1

伝道は人なり

よく知らぬ  
神の国は天にあり  
神の国は天にあり

神の国

三者合意(→)のり

日本同盟基督教団 世界宣教戦略会議

2007年8月12日(日)

神の  
主権性、信仰の

「聖書から学ぶ宣教戦略」

マニラの味

宣教

Actsに於て

東京基督教大学 倉沢正則

はじめに

日本同盟基督教団国外宣教委員会主催の『世界宣教戦略会議』において、「聖書から学ぶ宣教戦略」という発題をするようにと依頼された。発題の時間的な制約と同盟国外宣教の今日的な必要を覚える中、特に、「使徒の働き」を中心に、初代教会とパウロの一行に見る宣教戦略に焦点を当てて見たい。なお、「戦略」とは、「戦術よりも広範な作戦計画」(『広辞苑』第四版)を意味し、世界大へのキリスト教宣教の作戦計画を意味する。

1 キリストの大宣教命令と「証しの御霊」

1) キリストの主権の普遍性と宣教の世界大性

神の人類に対する永遠の救いのご計画は、イエス・キリストの十字架と復活による贖いのみわざによって実現した。そして、12使徒を土台とするキリスト教会に、主キリストから「神の国の福音」の伝達が託された。その簡潔な命令が、「大宣教命令」(マ 28:18-20)である。ここで注目すべきは、「わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。」(18節)というキリストの主権の普遍性である。この普遍的なキリストの主権性の宣言があるからこそ、「あらゆる国の人々を弟子とせよ」という宣教命令の世界性が意味を持つてくる。そして、「あらゆる国の人々」とは、第一義的に、「異邦人」を指す言葉である。それは、「真の神を知らない人々」のことであり、ユダヤ人以外の人々である。イエスの存命中には、彼自身もその弟子たちも、「イスラエルの家の滅びた羊」(マ 10:6)のもとに派遣され、「御国の到来」を告げた。復活後は、「ユダヤ人をはじめ、ギリシヤ人(異邦人)」(マ 1:16)にも遣わされるのである。

2) 聖霊：宣教と教会形成の第一人者

罪の赦しと永遠の審きからの救いは、人の善き業によるのではなく、キリストの贖いに基づく神の恵みの賜物であり、それは始めから終わりまで「キリストへの信仰」によって与えられるものである。しかも、その信仰さえも起こしてくださる方こそ「聖霊」であり、その方が、人をキリスト信仰に導き(1コ 12:3)、また、キリストに似た者となるよう私たちを変えてくださる方である(2コ 3:18)。けれども、主イエスによれば、聖霊こそ「証しの御霊」として、キリストの証言をなしてくださる立役者である(マ 10:20, ヨ 15:26, 使 1:8)。聖霊こそが、キリスト者の証しを大胆にして(使 4:31)、人々をキリストの弟子とし(使 2:47)、また、教会を聖め整え(使 5:11)、生じる問題を乗り越えさせて(使 6:3)、民族的・宗教的偏見を是正し(使 10:35-36)、キリストの教会を建て上げ、世界大への宣教へと教会を押し出すお方なのである。教会の存在とその使命の両方の鍵を握られるお方が聖霊であ

福音

福音

福音

パウロの

パウロの

福音

福音

福音

福音

福音

エスネ  
↓  
エスニ?

る。「宣教と教会形成」は聖霊の働きであり、それはキリスト者が「ともに祈り、聖霊に満たされる」（使 1:15,2:1,44,46,4:13）ことから始まることをまず覚えなければならない。

## 2 初代教会の地理的発展の経緯とその要因

### 1) 宣教の推進力

聖霊によって生み出されたエルサレムにある初代教会の姿が、「彼らは使徒たちの教えを堅く守り、交わりをし、パンを裂き、祈りをしていた」（使 2:41）として描かれている。これが教会形成の屋台骨と言える。教会が健全に制度的にも靈的にも建て上げられるには、聖書のみことばが堅く守られ、聖礼典（洗礼と聖餐）をもってキリストの恵みが享受され、教会指導者たちの職責が重んじられ（使 2:42,6:2）、教会訓練が尊重されることが肝要である（使 4:35,5:11）。そして、キリスト者の主イエスへの「愛と献身」、互いの重荷を担い合う「交わり」、互いのために祈り合う「祈り」が宣教の推進力となることを覚えたい。

### 2) 福音伝播の内的・外的要因

「使徒の働き」は、主イエスのことば（1:8）の実現として、福音の進展状況を随所で要約している。その前半では、エルサレム（6:7）、ユダヤ・ガリラヤ・サマリヤ（9:31）、そして、アンテオケ（12:24）、後半では、小アジア（16:5）、ヨーロッパ（19:20）、ローマ（28:31）に至る。この進展は、順風満帆という中ではなく、エルサレムの教会は、外的には迫害に苦しめられ（5:17,6:14,12:1）、内的には異邦人に対する自分たちの民族的偏見と向き合わねばならなかった（10:14,28）。外的要因との関連では、ユダヤ人で構成されるエルサレム教会を異邦世界へと宣教に押し出したのは、「宣教計画」ではなく迫害であった。そこでは、12使徒以外の名もないエルサレム教会の信徒たちによる「草の根的な宣教」（使 8:4）に負っていた。それができたのは、地中海世界がローマ帝国の支配下であり、コイネーギリシヤ語が共通語として広く使用されていたことである。また、帝国の支配に反しない限り、個人的な信仰については寛大であった。パウロの伝道旅行以前に、パレスティナやシリア、タルソ、ローマにはすでにキリスト者がいた（Green 1970:257）のも、これらの信徒たちによる自発的な証しがあったものと言えよう。これらのことを踏まえると、今日、世界に散っている日本のキリスト者のビジネスマンや医療関係者、教育者、技術者らを世界宣教へと励まし、彼らが自発的に証しができるよう祈り、整える必要がある。

内的要因については、ユダヤ人キリスト者が異邦人に対する民族的・宗教的偏見と向き合わねばならなかったように、特に、異文化宣教師には、自らが直面する「文化ショック」の根底にある「単一文化的視点」と向き合う必要が出てくる。ここでは、「異文化的な視点や理解」と、異文化における「文化適応」という課題である。さらに、福音が世界性を帯びてくるのは、「エルサレム会議」によって、神学的には「律法と福音」の関係が整理されたこと、牧会的にはユダヤ人キリスト者と異邦人キリスト者の交わりの課題が克服された

こと（使 15:6-29）であった。今日的な適用として、宣教師が異文化の人々に意味のある福音を提示するためには、宣教地の人々の文化理解と福音理解の両方を深める必要が出てくる。今日の宣教師には、異文化適応力のみならず、神学を異文化的な視点から再構築する神学力が求められる。

### 3 パウロの異邦人への召しとその宣教戦略

なぜ召しは、パウロの召しなのか？

#### 1) 町とその近隣から、その地域を越えて

厳格な律法遵守者であり、教会の迫害の急先鋒であったパウロを主イエスは召し、「異邦人への使徒」（ガラ 2:8）とされたことは、福音が「隔ての壁」を越えて、「キリストにあって一つ」（エペ 2:14-16）となることの証左でもある。アンテオケにある教会は、その町とその近隣に宣教していたが、聖霊は、同時にその地域を越えて福音を宣べ伝える働きのために特定の人々を召された。召されたバルナバとサウロは、教会にとっては痛手であった。二人の指導と教育によって教会が形成されてきたからである（使 11:22-26）。しかし、教会が彼ら二人を指示どおり送り出すことによって、互いに欠けを補い、次世代の指導者が育ちうる環境となったことも確かであろう。聖霊は絶えず教会を「外（異質な人々）」へ、「全世界」へ、「福音をまだ聞いていない人々」へと導かれる。かくして、「パウロの一行」（使 13:13）という宣教団が組織され計画的に宣教がなされることとなった。

聖霊記

今日的な意義を考えるならば、これからの教団国外宣教のためには、教団にとって痛手と思われる人物、特に、教会開拓とその指導と教育に賜物を持つ宣教師（複数）を送り出していく必要があるのではないか。しかも、次世代の後継者を育てることのできる人物が望まれる。実際、宣教地における教会開拓から現地指導者を生み出す働きがより重要となるからである。そうすることによって、教団には新たな次世代の指導者が、主によって起こされてくると信じることができる。

#### 2) 「パウロの一行」が訪れた町々とその地理的戦略

Ro 15:19-

「パウロの一行」は、第一次伝道旅行としてキプロス（バルナバの生まれ故郷）から南ガラテヤを巡回する（使 13:4-14:26）。第二次伝道旅行は、エルサレムから陸路で、タルソ、それから第一次伝道旅行で訪ねた町々を巡って、さらにアジアやビテニヤに行こうとしたが適わず、聖霊の指示の中でトロアスに下り、マケドニアとアカヤへの門が開かれ、それからエペソに戻ってエルサレム、アンテオケに帰って来る（使 15:36-18:22）。第三次伝道旅行は、前回訪れたところへ向うが、違いは陸路で前回禁じられた地域であるアジア（小アジアの西海岸の州）を巡回できたことである（使 18:23-21:16）。そして最後はローマへの航路となる。

パウロの地理的戦略を考察する際に参考になる彼の主張が、「私はエルサレムから始めて、

ずっと回ってイルリコに至るまで、キリストの福音をくまなく伝えました。・・・今は、もうこの地方には私の働くべきところがなくなりました」(マ 15:19,23)にある。彼は次の宣教計画(スペインへの伝道)を心に描き、地中海世界の東から西のすべてという範囲(全世界)を見ていた。上記で見たように、パウロはすべての町々に赴いたわけではない。地中海世界の東側、しかも小アジアとマケドニア、アカヤ地方であった。ローマ帝国の大都市北アフリカのアレキサンドリヤには行かなかった。というのも、そこにはすでに福音が伝わっていたからである。彼は、「キリストの御名がまだ語られていない所に福音を宣べ伝える」(マ 15:20)ことを求めていたからである。パウロの宣べ伝えた町々はすべて当時の「貿易通路」にあるものであり、パウロが第一次伝道旅行で訪れたピシディアのアンテオケやイコニオム、ルステラ、デルベはアジア最大の都市エペソから東方への「貿易通路」であった。また、アジア州にある七つの教会(エペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルデス、フィラデルフィア、ラオデキア)(黙 1:11)も実はアジア州の「循環道路沿い」にある町々であり、それら七つの町々には郵便局の本局が置かれていた

情報や拡散の中心地

(Green 1970:259)。同時に、パウロが宣べ伝えた町々は、ローマ行政区やギリシャ文明の中心地であり、離散のユダヤ人の影響が強い場所でもあり、商業中心地でもあった。さらに、人々が四方から集まる場所のみならず、その町から外へと物事が広がり始まる中心地に福音を宣べ伝えたのである(Allen 1962:16)。地理的接触が可能であり、道路網が敷かれている町々であった。

パウロが福音を宣べ伝えた場所は、前述のごとく、その地域にその情報が容易に拡散する都市であり地域の中心地であった。「使徒の働き」におけるアンテオケはローマ帝国第三の都市であり、ピリピはローマの植民都市、テサロニケはマケドニアの主要都市であり、コリントはローマ行政下でのギリシャの首都、パポスはキプロスでのローマ支配の中心地、エペソはアジア州の主要都市であった。福音の拡散に果たす都市の役割を見て取ったパウロの宣教計画(戦略)の一端が垣間見られる。さらに、彼の戦略は、各州に目を向ける。アジア、マケドニア、アカヤという州である。そして、それぞれの州の中に、信仰の中心地を二三箇所設けて、そのキリスト者たちにその近隣の宣教を委ねたのである。たとえば、マケドニア州では、テサロニケ、ペレア、ピリピである。また、アカヤ州では、アテネとコリント、キプロスでは、サラミスとパポス、アジア州では、エペソに二年間滞在して、コロサイやラオデキアに福音を宣べ伝えた。彼はそれぞれの町に長く滞在せず、そこでキリスト者の群れが起こされれば、すぐ彼らにその近隣の宣教を委ねている。それを通して、その地域教会をみことばと聖霊に委ね、その指導者や信徒らを整えて証しを託したのである。それによって、教会は宣教師依存から免れ、自立した教会運営と宣教に励むことができた。

みことば  
聖霊の働き

同盟国外宣教の地理的戦略を考えると、このパウロの州戦略に倣い、「キリストの御名

がまだ語られていない場所」を今日的に問うことが必要であろう。例えば、「10/40の窓」にあるアジアの国々を宣教地として採用すると、北東アジア、東南アジア、南アジア、中央アジアと分類することができよう。そして、北東アジアでは、モンゴルでウランバートル以外の第二の都市や中国でまだ福音が伝わっていない地域の主要都市がどこであるのかを調査して、それぞれの都市を特定する。東南アジアでは、すでにバンコクへの宣教がなされているが、バンコクを起点として、プノンペンやホーチミン、ヤンゴンへの宣教が考えられる。南アジアでは、スリランカの南アジア宣教への支援と北・北東インドの主要都市への宣教を考えることができよう。さらに、中央アジアは、イスラム教の強い地域であるが、かつてのシルク道路網に沿う主要都市を調査する必要があるだろう。やがて、中央アジアの向こう西アジア（中東）から北アフリカを射程にとらえる戦略が必要となる。

### 3) パウロの宣教活動戦略

パウロにおける宣教の目的は、「御名のためにあらゆる国の人々の中に信仰の従順をもたらす」（ロマ1:5）ことであった。そして、彼の宣教への動機は、「返さねばならない負債」意識である（ロマ1:14, 1コリ9:16）。また、当時教会が持っていた「差し迫ったキリストの再臨」意識もパウロをして宣教へと駆り立てていたようである（1テサ1:10）。彼の宣教活動の作戦計画は、第一に、福音を宣べ伝えることであった。どのような人々に福音を宣べ伝えたのかについては、その町や地域の指導者に向かったとする意見（Green 1970:261）と、特定の階層の人々を特に意識していたわけではないとする意見（Allen 1962:22）と分かれるが、恐らく後者の方が妥当性が高いと思われる。「使徒の働き」の記述には、地域の指導者や高官、貴婦人の登場もあるが、全体的にはわずかであるし、パウロによる回心者たちは身分の低い商人、肉体労働者や解放奴隷や奴隷が多かった。しかし、パウロは特定の階層の人々を意識していたわけではなかったと思われる。第二に、「土台を据える」（1コリ3:10）ことであった。生まれつつある信者の群れを養い育てることを意味する。そして第三に、その教会を強めてキリスト者の円熟を計り、彼らを整えて「宣教の教会」とすることであった。こうして、テサロニケやコリント、エペソのような、地域の戦略的な中心地に確固とした教会を設立して、近隣への伝道をその教会に委ねたのである（Brien 1995:43）。

### 4) パウロの宣教対象戦略（Marshall 2000:107-109）

宣教の対象については、前述のごとく、ある特定の階層の人々をターゲットとしたようには思われない。パウロの宣教の働きは、「全ての人々に対しての証し」（使22:15）であった。パウロは、「イスラエルの子孫の前に」（使9:15）キリストの御名を運ぶとともに、「遠く異邦人に遣わされる」（使22:21）使徒であった。パウロは、実に、「ダマスコにいる人々をはじめエルサレムにいる人々に、また、ユダヤの全地方に、さらに異邦人にまで」（使22:20）宣べ伝えたのである。

しかし、パウロには明白に、「ユダヤ人をはじめ、ギリシャ人（異邦人）にも」（マ 1:16）という意識があった。神の救いのご計画は、イスラエルを通して表され、契約も約束もまず彼らのもので、キリストもユダヤ人から出られたゆえ、同胞に対する救霊への熱き思いがあったからである（マ 9:3-5）。事実、彼の宣教のアプローチは、新しい町に赴くと、初めに「ユダヤ人の会堂」を訪れ、ユダヤ人たちと接触する。サラミスでもピシデヤのアンテオケでもそうであったし、以後、「いつもしているように」（使 14:1,17:2）と記されて、イコニオム、ピリピ、テサロニケ、ペレア、アテネ、コリント、エペソと「会堂」を訪れている。パウロにとって「会堂」は宣教を始める良い戦略場所であった。彼は、会堂にいるユダヤ人にまず福音への応答の機会を与え、それから異邦人へと向ったのである。

在外日本人  
日本人宣教師  
宣教地  
宣教者  
宣教内容

今日の日本人宣教師もこのような視点があっても良いのではないだろうか。現在、同じ宣教地で、異文化宣教をする宣教師と日本人教会や日本語教会への宣教師がその働きを分業しているが、同じ宣教師が二つの働きをする可能性があっても良い。そうすることによって、同胞宣教と異文化宣教が宣教師を通して並行して行われ、しかも、二つの群れがそれぞれへの宣教意欲をもつように、宣教師は彼らを励まし教えることができるのではないだろうか。

日本語を伴う宣教  
宣教者

5) 伝えるべき福音の内容戦略

パウロが異邦人に伝えた簡潔な福音の例証が1テサロニケ 1:9-10にある。「テサロニケ人への手紙」はパウロの初期の執筆（51A.D.-52）であるが、パウロが旧約聖書の知識のない異邦人に宣べ伝える福音の内容が示されている。パウロのメッセージとは、第一に、偶像と唯一の生ける真の神との根本的な違いに触れ、第二に、この神の御子イエスの死と復活を語り、第三に、不信者を審き、神の民を救うためにイエスが再臨されること、第四に、偶像から立ち返って（悔い改めて）、生ける神に仕えるように（信仰と従順）アピールすることであった（Allen 1962:68, Howell 1998:71）。このメッセージの特徴は、第一に簡潔であること、第二に事実を述べるのみでなく応答を聞き手から求めること、第三に聞き手の世界観にメッセージをフィットさせていることである。「簡潔」であるためには、福音の内容を熟知する必要があるが、簡潔なメッセージは、伝達を容易にさせ、聞いた者が第三者に伝えやすくする。「応答を求める」ことは、聞くひとり一人の回心を意図しているからである。「聞き手の世界観にフィットさせるメッセージ」は、今日「文脈化」として知られるが、福音を福音とする内容を変更せずに、その内容を聞き手に意味あるものとし、適切に「届く」ために必要なことである。例えば、ピシデヤのアンテオケでは、ユダヤ人や「神を恐れかしこむ人々」を前に、「イエスがキリストである」（使 13:23）と弁証し、ルステラの異教徒には、創造主の祝福と偶像礼拝の愚かさを説き（使 14:15-17）、アテネの哲学者たちには、「『知られない神に』と刻まれた祭壇」（使 17:23）という彼らの銘から語り出し、アニミズムの盛んなエペソでは、「力の対決」によって福音の真実さを示したのである（使

福音理解

結論 →



福音の歴史  
記録

この本は  
この本が  
あるゆえに

7

19:11-20)。

おわりに

「使徒の働き」やパウロ書簡に見るパウロの宣教活動で一貫していることは、「聖霊の中心性」である (Allen 1962:149-150, Howell 1998:77-91)。パウロの宣教は、いずれも聖霊への意識的な信頼によって遂行されていった。伝道と教会形成がみことばと聖礼典によって行われるために必要であるのは、聖霊への信頼と確信である。聖霊こそが人々や教会に罪を認めさせ、正し、導き、強めるお方である。この確信を教会指導者や宣教師はもう一度呼び起こす必要があることを聖書から探られる。宣教師パウロは、伝道しキリストの群れが起こされるや、滞在期間をできるだけ短くして他の場所に移動していった。その群れに指導者を立て、彼らを「恵みのみことばにゆだねた」(使 20:32) とある。それは、みことばとともに働く聖霊が、宣教師パウロが不在の時にも、教会を導き、保ち、牧するという確信を持っていたからである。もちろん、時にテモテやシラスの派遣や書簡を通して彼らを指導し、励ましたことであるが、なるべく早くその地域教会にリーダーシップの責任を渡していったのは、パウロの聖霊への全き信頼のゆえである。このことは、地域教会の宣教師依存を解消させ、自立した教会形成へと促がすものとなったに違いない。そしてこの聖霊への信頼はパウロをして「とりなしの祈り」へと赴かせた。パウロは、諸教会のために祈っていること、その教会がこうなってほしいという祈りをしていること、自分のための祈りを求めていること、祈りについて教えていることなどから、如何に諸教会を覚えてとりなしの祈りをしていたかが書簡から教えられる (Howell 1998:87-91)。「祈りの戦略」こそが、パウロの宣教戦略の根幹を占めていたのである。

<引用文献>

Roland Allen, *Missionary Method: St. Paul's Or Ours?*

(Grand Rapids, MI: Eerdmans, 1962).

Michael Green, *Evangelism in the Early Church*. (Grand Rapids, MI: Eerdmans, 1970).

Don N. Howell Jr., "Mission in Paul's Epistles: Genesis, Pattern, and Dynamics." In

*Mission in the New Testament: An Evangelical Approach*. William J. Larkins Jr. and Joel F. Williams, eds., (Maryknoll, NY: Orbis Books, 1998). Pp.63-91.

I. Howard Marshall, "Luke's Portrait of the Pauline Mission." In *The Gospel to the Nations*. Peter Bolts and Mark Thompson eds. (Downers Grove, IL: IVP Press, 2000). Pp.99-113.

Peter T. O'Brien, *Gospel and Mission in the Writings of Paul: An Exegetical and Theological Analysis*. (Grand Rapids, MI: Baker Books, 1995).

責任ある命、40年をやり遂げるまでこの旗を共有するべき

この旗を3代目まで継いでいく。 歴史、つらさ、あきらめ

おれは5年2年をやり遂げた!

VISIONは愛をこから  
つら  
愛をこ  
の旗を  
これだ!

日本同盟基督教団 世界宣教戦略会議

2007年8月12日(日)

47年間の歴史

### 国外宣教40周年の評価

研中(中)

吉持 章

78才

→ どうしてこれだけこつこつとやってきたのか?

ドレ、70-2  
こいをやるんし

1 1964年4月7日の設部まで (それまでも有名無実の部名はあった。)  
1965年 国外宣教特集号を発刊  
1965年 8-9月、吉持章と荒川三樹雄が、ある方からの個人的なサポートを受け、パスポートをもって沖繩を訪問。新約聖書百冊、聖歌20冊を届ける。

2 部活動が認知されるまで  
1966年 教団顧問 故松田政一師を台湾訪問に、理事長の故安藤仲市師を沖繩訪問に行つて戴くべく航空券の半額を支援させていただく。  
帰国後両師に視察報告を書いていただく。(宣教版第2号参照)  
同じく故野畑新兵衛師、故木下弘人師にも国外宣教への啓発記事を書いていただく。こうして国外宣教は揺るぎない市民権を得た。

1968年 国外宣教版第3号(別紙)に「国外宣教の責任所在」と題して何故国外宣教を教団でしなければならないかの理念を述べる。

3 支援体制の確立に向けての努力  
国外宣教版の定期的発行により関心を高める。  
ある教会は礼拝献金の半額を国外宣教に献げる。  
1968年 全教会に国外宣教の献金箱をお配りして、献金への協力をお願いする。

4 開部から10年の苦闘  
・ 人材の発掘  
・ 財政の確立  
・ 派遣地の選定  
・ 体験宣教

5 派遣教師間の交流  
・ 台湾  
・ インドネシア  
・ タイ  
・ カナダ イヌイット

宣教師は、仲間の宣教師たちはどうしているだろうかを知りたがっていた。そこで委員長の独断で悪口広場なる文章を作って、各宣教師の情報を中継した。

6 国外宣教20周年大会の祝福  
これに関しては(別紙、国外宣教版第90号参照)

門外漢  
・ 外国人  
さうぞい

ヒガ所得  
子理の教育  
老練  
11190-  
7077  
海79007

神力は外国にはなし

儲け金に箱

送る宣教師が各団の苦闘  
現地からの苦闘を伝えている

VISIONを持ち続けて

隣の宣教師  
たすの支那  
をつたぐひた

おるくすのり  
失敗は

万筆奉答

1964年・2007年

礼拝献金の半額を国外に

共闘

TEAMの旗

宣教師が11人  
伝道士が1人

国内外に450(世界宣教!)

25, 30, 40

文藝集

この旗は = 歴史の連続

フランクフルト  
宣教師

おもしろ  
宣教師の  
世界宣教の

日本同盟基督教団 世界宣教戦略会議

2007年8月13日(月)

## 「支援体制の強化」

笠川 徹三

序

私のテーマは国外宣教の働きをどうしたらさらに深く教団全体の働きとしていけるかを考えることです。それは国外宣教に直接携わっている国外宣教委員会及び宣教師たちと教団の教職及び信徒たちとの間の距離を縮め、より身近なものにするにはどうしたら良いかを考えることです。国外宣教は教団全体で取り組んでいる働きですが、諸教会がいかに主体的に国外宣教をとらえ、担っていくことができるかです。

### I. 国外宣教の理念とビジョンを明確にすることです。

#### 1. 国外宣教の理念を明確にすることです。

大宣教命令に基づき、教団の責任のもとで宣教師を派遣し、すべての人に福音を宣べ伝え、その地域に根ざした地域教会を設立し、できるだけ早く現地の指導者に委ね、その教会が国外宣教に従事するように支援することです。

#### 2. ビジョンを明確にすることです。

すべての人に福音を伝える理念のもとで、全世界伝道を目指すことを明確に示す必要があります。世界の主な地域への宣教師の派遣を夢見て、祈っていく必要があります。イスラム圏と言う世界に広がる閉ざされた宣教地に対する派遣や巨大な人口を有する中国への派遣を祈る必要があります。これらの地域の場合、テントメイキング伝道を考慮しなくてはなりません。国外宣教がテントメイキング伝道にも柔軟に対応することができるようにすべきです。小さな教団ですが、全世界伝道のビジョンを明確に打ち出すべきだと考えます。

### II. 宣教師の働きのあり方を再考することです。

宣教地での働きと日本の教会での働きのバランスを取ることです。

宣教師の働きには宣教地と派遣している日本の諸教会と対して責任があります。

#### 1. 日本の教会に対する責任について

支援を通して国外宣教に共にあずかるように働きかけることであり、また諸教会にとって祝福となる国外宣教を目指していくことです。

課題は帰国の期間が十分に取れていないことです。たとえば、4年現地で働いた後、1年間は帰国し、家族のリフレッシュと宣教報告、学びの時を持つことをルールとしたらどうでしょうか。そのためには、委員会が提案しているホームチャーチ制度を推進することが必要だと思います。予算の問題も起きてきます。その必要を訴えることです。

宣教師のファローのための帰国は派遣している諸教会との絆をしっかり結び合わせるときです。この堅い絆なくして再び宣教地に赴くことはできません。

2. 宣教地での働きを再考する。

定期的な、長期間にわたる帰国を行うためには、現地における働きのあり方を再考する必要があります。宣教の働きの結実のためにも、継続のためにも今までのやり方を再考する必要があるのではないかと考えています。教団が派遣してきた宣教地にはすでに現地教会、教団があり、また宣教団が存在しています。その宣教地の教会、教団と初めから協力し、現地の支援体制の中で宣教師が働くことが継続の良い実を結ぶことになり、宣教地を一時的に離れることも可能にするのではないのでしょうか。

3. 諸教会と宣教地を結びつける働きに取り組むことです。

諸教会の祝福になる国外宣教を目指すことと、宣教地の働きの支援を目指し、さまざまなプログラムを実施する。今までなされてきた諸教会と宣教地を結ぶ取り組みを高く評価します。諸教会に大いなる祝福をもたらしてきました。それらの取り組みを継続し、大いに推進し、また新しい取り組みを開発したら良いと考えます。

4. 宣教師派遣制度を再考することです。

短期宣教師制度を特例ではなく、一つの制度として確立してみてもはどうでしょうか。また、教職育成、及びリフレッシュプログラムに国外宣教の働きを結びつけてみるはどうでしょうか。教団の教職の育成、質的成長を目指すとき、国外宣教の働きの中で今求められている教職の育成が実現できるのではないかと考えます。

(ア) 2～3年の短期宣教師として派遣します。

(イ) 教職のリフレッシュ研修制度として海外における奉仕を制度として教団と連携します。

(ウ) 教職を宣教地視察に派遣します。

III. 委員会を拡大することです。

委員会と教職間の距離を縮める。そのために委員会の拡大を提案したい。その意図は重荷を持つ教職を増やしていくことです。これは諸教会の支援の強化につながるのではないかと。

いろいろな拡大の仕方があると思います。たとえば、地域支援委員会を作る。各宣教区ごとに一名を地域支援委員として選び、4名で地域委員会を定期的に持つ。そこでは国外宣教委員会の重荷を共有してもらうために、委員会で話し合われていることを分かち合い、最新の情報を提供し、一緒に考えてもらうことである。また地域支援委員が各宣教区で国外宣教の重荷を分かち合う働きをしてもらう。地域支援委員会の役割は、諸教会がいかに宣教師及び宣教地と関わりを深めていくかを話し合うことです。また実際の交流の企画、実施を行うことです。

IV. 広報活動を見直す。

世の光誌国外宣教版、祈りのネットワーク、毎月の祈りの課題、国外宣教デー等を点検し

40年12月  
支障会  
OB会

働きのまじり

見直すことを絶えず行うことです。

#### 結び

支援の強化のカギは、第一に、国外宣教の理念とビジョンを明確にして提示すること、第二に、宣教師と諸教会との絆を固く結ぶこと、第三に、教職に共に重荷を担ってもらふこと、第四に、諸教会の信徒たちと宣教地の人々とは豊かな交流を持つようにすることです。

今でこそ

台湾 TEAM 支援カンセー

高知 → 盛岡 → 国府新野

宣教師と教会の間の  
きりぎりす

2007年8月13日(月)

日本同盟基督教団 世界宣教戦略会議

教会の見えるおとぎあり  
支えの側面

### 宣教師のトータルケア

宣教師の発掘、育成、支援 (メンタルケア、子弟教育、他)

清野 聖

救済をからむにのみまかすと思ふ...

寺田 由弘

#### 1. 宣教師はケアを必要としている

1) 宣教師はスーパーマン、スーパーウーマンか?

弱地見せたい人

TEAMからは  
借り物宣教師

宣教師自身：召された主への思いと背後の教会への責任から、スーパーマンであらうと願う。

教会：宣教師にスーパーマンであることを願う

2) しかし現実には厳しい

宣教師は多くの圧力に直面する (日本国内の牧師も同じであるが)

a. ことばの壁 (現地語、英語) わかん不安

b. アメリカ人の中で マリキ

c. 現地ミッション、現地教会の中で 一人では同僚者

d. 異文化との戦い どうやってこの人々を愛しているのか? 祝福してのうちはいいよ

e. 日本の教会への対応 どうやって求めるべき? 本場の教会のペース

f. 家庭内での対応 独身者

g. 健康・霊性の対応 etc...

宣教師はケアを必要としている 医者の関係

★ パートワーク

全教員

データの整備

日記  
ブログ

予備金

おねがい  
しませよ  
せり

おのわかれ  
出て行く  
宣教師を支援

こもん  
おんせう  
医者

独身女性

教員  
マンツーマン  
マンツーマン

#### 2. 誰がケアをするのか?

1) 神ご自身との向き合い 使命 必命

2) 宣教師自身 (出発前の訓練が必要)

3) 宣教委員会および専門のケア手段 TEAM?

先期を終えて帰って来た時 → せつ (無力、はたらく) のサポート

#### 3. いつするのか?

1) 宣教師派遣前 (正教師按手を受けてからの派遣が大切 / 教会を知って) (for 教会側) 補償はあつたけれどどこに配  
という要領を

2) 宣教師派遣後 (現地奉仕中、帰国教会巡回中の宿泊先の確保)

3) 宣教師引退前後 (特に引退後のケアが大切) 寺田から → 事務所

#### 4. 宣教師の発掘

1) 宣教師理念の改革が必要  
世界宣教の理念による教会形成

個々の教会の日記の教会の中で  
何のために使われているのか?  
最終的の目的?  
飛ぶか止るか

日本では生活環境が

宣教師  
派遣

おんせう  
宣教師  
教会形成

単発的ヴィジョンでなく、総合的、継続的ヴィジョン

- 2) 神学校教育  $\rightarrow$  神学での学び、体験
- 3) 祈り

5. 子弟教育 神学  
 計画性をもって、両親へのケア

6. 健康面のケア (健康診断後)

引継ぎ宣教師  
 宣教師の役割

教会が喜ぶ設置していい  
 ために世界に目を  
 向けたいから

無理なことをやって

11ヶ月後の実践

適切な  
 注意がポイント

日本の働きの一部としての 国外宣教

最高の目的  
 最高の働き

模範の働き

国外宣教を  
 宣教師に任せる  
 理由はあり

初期の宣教師



宣教生

2年間の働き  
 人への働き  
 本心から

宣教師  
 としたら仕事経験を教える

本心から  
 宣教師  
 同じ同僚者  
 知ってほしい  
 本音のこゝろを祈ってほしい  
 現地で保つ

宣教師  
 カルネーション  
 1-2人組はカルネーションが望ましい

委員会

経済的支援

ドル・円  
 両替機

専任

電話、メール

宣教師の視点

文化の  
 異文化と対人

コミュニケーションスキル

宣教師  
 現地の人が喜ぶか?

宣教師

他国から来た

松下輝  
 宣教師の役割  
 日本に? 神学

宣教師の派遣を促していることでは済ませない。

【5月理事会提出の国外ビジョン訂正版】

④⑤と現地

『教会形成・アジア21、そして世界へ』

—エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで

- I. 日本同盟基督教団の国外宣教は教会形成を目指す。
- II. 21世紀にアジア全域へ宣教師を送る。
- III. アジア諸教会と協力して全世界へ宣教師を派遣し、再臨を待ち望む。

宣教師の派遣はもう  
同盟と現地教会との間に  
交流を築いていく  
自らの存在は何を成す?  
福音の文化と偉業  
の積み

序：日本同盟基督教団の国外宣教

この体のか、文化のか  
地理的とか

日本同盟基督教団は宣教師による「国外宣教」で始まりました。フレデリック・フランソン師らが世界宣教への情熱を語り、それを受け取った宣教師が横浜の埠頭に降り立ちました。百有余年の歴史を経て日本同盟基督教団が今日のようにあることを思えば、その第一歩がいかに大きな実を結んだかに感慨を覚えます。

初期派遣

彼らの宣教への志は後に、「世界的視野に立った宣教」「犠牲をおしまない救霊の情熱」「教派形成にとらわれない宣教協力」という霊的遺産を日本同盟基督教団に残しました。私たちはこれらを受け継ぎ、日本とアジアそして世界を宣教の視野に納める世界宣教に取り組み、次の第一歩に情熱をもって踏み出す教団として立ち続けます。

PASSION

同盟の神学  
神学力  
三位一体  
4.1.7-7

「再臨のまはく化」★

- I. 日本同盟基督教団の国外宣教は教会形成を目指す。

どのような宣教の働きであれ、それは教会を形作ることを軸に進められる働きであると私たちは信じます。宣教115年。日本同盟基督教団において宣教師や牧師が取り組んだ働きは多彩でした。多彩ではあっても、それが主のからだなる教会を建てあげる視点を持たなければ、歴史の中に立ち続けることができないことを学びました。

★  
自立?

また40年を越える国外宣教の働きにおいて、派遣された宣教師たちは教会形成のさまざまな段階で奉仕してきました。宣教の耕地を耕すために聖書翻訳や医療支援に携わった者。福音の種まきとして伝道や信仰教育に励んだ者。また成長した現地に「自律」する教会で奉仕した者。それらさまざまな段階・状況にあっても、自らの働きを位置づけるために見失わない一筋が、日本同盟基督教団の国外宣教理念「教会形成を目指す」です。

よって、パラチャーチと呼ばれる分野において奉仕しておられる他団体に敬意を払いつつ、私たち日本同盟基督教団は今後もこの「教会形成」を軸に世界宣教を進めてゆきます。

- 1) 「現地教会の形成」：聖書信仰と宣教協力を旨とし一致している日本同盟基督教団の特質を生かし、現地の教団や教会を重んじ協力しつつ、現地に自律する教会形成を目指します。

- 2) 「人材育成」：教会形成には人材育成が大切な要素となります。よって宣教の初期段階から、現地の働き人を育てる、という視点をもって取り組みます。

TEAMの神学  
神学教育  
教職も養成

1916年70年記念

7/11/17  
NEWフェイス

建物とか。人が集まる

TCI 聖霊の賜を養育



☆ 国家を越えて  
公團の教会？  
神の国？

様☆

3) 「現地の必要に即した多様な派遣」：福音に門戸を閉ざしている社会に向けては、技術などを持ち入っていく宣教師が必要です（教職宣教師とともに信徒宣教師の必要性）。また、宣教地によってさまざまな段階があります。よって、現地の必要に即した多様な派遣をしていきます。

どう教団のりとアセビてくわ  
アセビにメソバークア

II. 21世紀にアジア全域へ宣教師を送る。 人材確保

私たちは、国外宣教70周年となる2034年を一つの目標に、アジア全域への宣教師派遣を目指します。「21」とは、宣教に取り組む21世紀を、そしてアジアの各地・各国を意味する数字です。

中央アジア  
をめぐりて  
アジアまで  
21世紀

アジアは、多様な文化と共に様々な社会体制が混在する地域です。これら地域への宣教を個々に、具体的に考えるとき、全域を一斉にはではなく、文化・社会のつながりを考慮しつつ、段階を踏んで進めなければならない、ということが見えてきます。

この課題を考慮しつつ、ビジョンを実現するための戦略的な派遣候補地は以下の通り。

一戦略的な派遣候補地一 次段階に向けての拠点づくり

月外

宣教師のあり

- 1) モンゴル (中国東北部およびアジア内陸部へ)
- 2) 中国 (やがて北朝鮮へ) 大々々々々々 北京→上海 1億7200万人
- 3) インドネシア (GPKAIとの協力による教会形成、イスラム圏)
- 4) シンガポール (東南アジア宣教の拠点、東南アジアのイスラム圏へ)
- 5) タイ (やがてインドシナ諸国へ)
- 6) インド・スリランカ (南アジア宣教の拠点)

インド・中国

国名？

これまでの宣教師派遣においては、おもに宣教師として立つ者の個人的ビジョンを教団的に受けとめて派遣してきましたが、世界を視野に入れた世界宣教の付託に現実に応えようとするとき、もう一度足場を固め教団が主体となって、アジア全域の宣教にまず取り組むことが必要であると考えます。

III. アジア諸教会と協力して全世界へ宣教師を派遣し、再臨を待ち望む。

私たちが「アジア21」とあえて掲げるのは、世界宣教を視野に入れてのことです。その働きをアジアに限定する意図ではなく、拠点を築き、段階を踏む大切さを覚えているのです。

アジアの諸教会と協力するためには、アジアにおいても文化や社会体制を手がかりに、いくつかの拠点から宣教を進める必要があるでしょう。例えば、すでに着手しているタイは今後インドシナ半島へ宣教を進める足場となることが期待されます。台湾から中国大陸へ。2007年度派遣のモンゴルは、やがてチベット仏教圏へ入っていく手がかりになる可能性があります。

☆

さらに世界への宣教を考えると、日本同盟基督教団が独力で宣教師を派遣するには数にも力にも限界があります。それならば、宣教地の教会と協力し、次の宣教地を目指す

現地の教会の協力  
OR  
宣教師の経理 (MISSION)

未伝地☆  
?

日本の教会

教会が教会としてあるために、国際的であるべき。

超国家

日本(20%) 台湾(20%) 欧州(20%)

アジアの教会

とを考えなければならないでしょう。

神の国の建設の道 教会と教会が交流をもちあう

ヨーロッパ

よって私たちは、上記Ⅱ. にある新たな派遣をしつつ、以下のことをしていきます。

- 1) 現地教会が、国内・国外の宣教に従事するよう支援する。
- 2) 各宣教地の教会と協力して、全世界へ宣教師を派遣することを目指す。
- 3) マケドニアの叫びに応じて、アジア以外の国々へも宣教師を派遣する。

(在外日本人・日系人宣教など、日本の教会が果たすべき同胞への宣教、その他、すでに宣教師を送ってきた国々への後続派遣も含む。)

- 現在宣教師を派遣している国への後続派遣  
—台湾、タイ、パプアニューギニア、モンゴル、(中国)、(日本/主事)
- これまでに宣教師を派遣したことのある国への派遣  
インドネシア、ネパール、ブラジル、カナダ (先住民宣教、日系人宣教)

アジアの教会の伝道化

アジアの教会

アジアの教会

インドネシア、ネパール、ブラジル、カナダ (先住民宣教、日系人宣教)

15%  
アジアの教会

『教会形成・アジア21、そして世界へ』大きな標語ではあります。けれども日本同盟基督教団 115年、国外宣教40年。信仰で始まった第一歩から、すでに二百を超える教会が建てられ、二十組を超える宣教師が派遣されました。これから主が、私たちを通してどのような実りをもたらされるのかまだ見えません。私たちに出来ることは、委ねられた宣教の使命に情熱を持って取り組み、宣教の第一歩を踏み出す日本同盟基督教団であり続けることでしょう。

「しかし、聖霊があなたがたの植えに臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」

(使徒の働き1章8節)

アジアの教会

アジアの教会

アジアの教会

アジアの教会

アジアの教会

アジアの教会

アジアの教会

アジアの教会

アジアの教会

アジアの教会

アジアの教会

アジアの教会

アジアの教会

アジアの教会

アジアの教会

アジアの教会

アジアの教会

GPKAI

TEAM

C&MA

JCS

JCS

マカオ

マカオ

マカオ

マカオ

マカオ

マカオ

マカオ

マカオ

マカオ

福祉宣教

アジアの教会

科学技術大学

インパ

インパ

今年不可能に思える

1) 3人可能性

この技術を持つ人

日新図書

日新

日新

同じ目標 → 継続可

献身者数トマ (しかし)

PASSION

★ ビジネスが成功すれば関係は開ける

★ 4.1%の割合で人材を募集する

220~230人 → 50~60名

1500名 → 100名

食料危機

中

農業技術

中

医術技術

吉野先生の証

本物の教会の改めをいさよー

下の証

付録

自分自身、主を信じて、他人に勧める

本物の教会